

◆金澤健 選

七月の「松山滑稽句会」より。今回の句会では“俳句は飽く迄も詩であって、事実をありのままに描写すればいいというものではない”ということ、皆で確認し合いました。

まずは、題詠句「かき氷」の句から。

三口で脳さんくちの萎縮やかき氷 井口夏子

お医者さんである久我正明先生の評は、「医学的には脳が爆発している状態にあるのだが、萎縮するという表現の方が、感じたままを素直に表しているし、読者にも良くわかる」というものでした。なるほど、久我先生の評に尽きるのではないのでしょうか。次は、自由句です。

炎天の立ち仕事かな通天閣 金澤 健

実は、実景として眺めたのは東京タワーで、原句は“東京タワー”でつくっていました。ところが、参加者から「東京タワーでは立派過ぎて、辛そうな感じが出ないのでは」というご意見をいただきました。これにすぐ賛同しまして、「それならば、親しみがあり、いかにも立ち仕事らしんどそうな通天閣にしよう」と相成り、改めた次第です。

今回の句会でも、座の文芸としての俳句の楽しさを味わうことが出来、自分では気付かない視点を学ぶことが出来ました。

◆「滑稽俳句集」出版のお知らせ 八木健

正岡子規と親交のあった佐藤紅緑が、明治三十四年に「滑稽俳句集」を編んで以来、滑稽俳句を集めた本は途絶えていた。六年前、八木健編「平成の滑稽」というタイトルの句集が世に出た。一〇七年ぶりのことであった。内容は、本阿弥書店発行の月刊俳句総合誌「俳壇」の中で、八木健が選者をしている滑稽句欄の句を中心にしたものだった。そして、この度、その

「俳壇」に掲載された、八木健選・滑稽句欄の三二一三句の作品を一冊に纏めた。平成十四年七月号から平成二十七年三月号までの、およそ十三年間のすべての作品である。これは、一一五年ぶりの本格的滑稽俳句集である。サブタイトルは、「滑稽の復権」とした。

十三年前、本阿弥書店の「俳壇」に、滑稽句の欄を創設して自身が選者となった。その欄は、「万愚節」という名称であった。当時は、「滑稽俳壇」というタイトルを付けてもらえなかった。なぜなら、出版社が俳人達からの反発を恐れたからである。その後、「微苦笑俳壇」という名称になり、十三年経って、やっと今年の四月号から、同欄は「滑稽俳壇」の名称となった。

本来、俳句は「滑稽」なものである。俳句は室町時代末期に起きた「俳諧の連歌」の発句が独立したものだが、俳諧の連歌は、貴族の連歌とは異なり、武士や町人がざっくばらんに俗な言葉で世俗的な内容を詠もうと始めたものである。だから、広辞苑の「俳句」には「滑稽な句」と第一義に解説されている。しかし、実際には「俳句が滑稽なんて不真面目なこと」と眉をひそめる俳人が多い。

八木健は、NHKの句会番組「俳句王国」の司会を十年間、担当した。番組に携わる中で俳句に本来の滑稽が失われていることに気付き、番組の司会を引退するとともに滑稽の復権を掲げて活動を始めたのである。平成二十年には滑稽俳句協会を設立して全国に会員を募り、毎月、会報を発送。滑稽俳句大賞を創設して毎年、滑稽俳人の顕彰もしている。平成二十五年からは、滑稽俳句協会会報の年間賞も設立。「俳句は滑稽なもの」という旗を八木健が掲げたのは二十年近く前になるが、この二十年間でようやく、「俳句は本来滑稽なもの」という認識が広まりつつある。様々な俳句欄や俳句の賞で、滑稽が意識されるようになってきている。この七月には、柳紅生さんが、第一五回俳句四季全国俳句大会の大賞を受賞した。

この度出版した「滑稽俳句集」は、平成の滑稽俳句を収録した、他に類のない唯一のものである。俳句の歴史の中では、子規も滑稽の大切さを言い、虚子も滑稽句を発表しているにもかかわらず、まだ大多数の俳人は、「俳句は真面目なもの」という認識で作句し続けている。この「滑稽俳句集」は、平成の滑稽句を後世に引き継ぐ役割を担った重要な書物である。